

49

市内最大の工業団地

えな 恵那テクノパーク

恵那テクノパークは、恵那市武並町の中央自動車道沿いの丘陵地帯に、3期にわたり開発された工業団地。近くには恵那山、かなたには中央アルプスが望める閑静で緑豊かな環境の中に、自然との調和が図れるように設計、配置されている。第1期は、県下5番目の県営工業団地として、1987（昭和62）年6月に総面積32.9㌥の本体造成工事が完了し、7区画が分譲を終了。第2期は、市営の工業団地として1992（平成4）年12月に総面積24.5㌥の本体造成工事が完了し、6区画が分譲を終了。現在、そのすべての区画で13社の企業が操業しており、従業員は約1,200人、製造品出荷額は約384億円。これは恵那市全体の製造品出荷額の約18%を占めている。また第3期拡張工事が完成して、平成22年7月26日に竣工式が行われた。総面積は11.2㌥で、2区画を分譲中。



手前の2区画が第3期の拡張部分

ひとくちメモ

- 市では2006（平成18）年に恵那市企業等立地促進条例を制定し、工業の振興を目指している。現在分譲中の第3期拡張分は、県土地開発公社と市が2007（平成19）年8月に事業の協定を締結。以来、期間約3年、総事業費約10億4,000万円で完成した。

関連
項目

50

国内生産シェア25%

げん し せいさんりょうにほんいち ダンボール原紙生産量日本一

大井町にある段ボール原紙を製造する王子マテリア(株)恵那工場は、製紙国内最大手の王子ホールディングス(株)の100%出資子会社。国内14カ所の工場での国内生産シェアは25%で日本一。段ボール原紙製造の工程は、まず、原料の古紙をパルパーと呼ばれる増埒状の攪拌機でどろどろにし、そこから粘着物やビニールなどの不純物を除去する。さらに除塵、叩解をして製紙に適合するように繊維を調成する。それを抄き上げプレスで機械的に絞り、ドライヤーで乾燥させて紙が出来上がる。岐阜県は古くから紙工業が盛んだが、東濃・木曽川沿いの恵那地域の紙産業は歴史が新しく、産業経済の進展に伴う紙需要の増大に対応して、段ボールなどの板紙製造業として発展した。



ダンボール原紙の生産風景

ひとくちメモ

- 恵那市の製造品出荷額の特徴は、特にパルプ・紙・紙加工品の比率が高いこと。ダンボール原紙を素材とした裾野産業である段ボール製造、段ボール加工などの事業所が数多く立地している。

関連
項目

せいさんりょうにほんいち

バイオリン生産量日本一

中野方町の恵那楽器(株)は、バイオリンの生産量が日本一。日本人で最初の世界的なバイオリン製作者であり、鈴木バイオリン製造(株)の創始者である鈴木政吉の2代目、鈴木梅雄が強制疎開で中野方町まで来たことに始まる。そして戦後は、恵那工場（中野方町）でバイオリン、ギターの製造を再開。1946（昭和21）年、現在の名古屋市中川区に本社を移転、1954（昭和29）年、恵那工場を(有)恵那楽器と改め、系列工場とした。現在、恵那楽器(株)では鈴木バイオリンのスタンダード製品の75%を製造。バイオリン、マンドリン、コントラバス、チェロを従業員全員がそれぞれの技術で製造している。また自社ブランド・サウンドエナとして、オリジナル製品の製造販売も手掛けている。



バイオリンの生産風景

● ひとくちメモ

- バイオリン工場と中野方町民との触れ合いの物語は、「バイオリンの村」（1979年・赤座憲久作・鈴木義治画）という創作童話として小峰書店から出版されている。
-
-
-
-
-

関連項目

こうしきようきんぞく

せいさんほんすうにほんいち

硬式用金属バット生産本数日本一

長島町久須見、木曾川に架かる笠置橋のたもとにある(株)住軽テクノ恵那は、(株)住軽テクノ100%出資の子会社。ここで生産される金属バットの本数は、甲子園で使われる金属製野球バットの約5割を占める。スポーツメーカーからのさまざまな仕様による金属バットの種類はざっと50種で、合金から製造方法までを開発し、一貫した生産設備で自社加工する。以前はアルミ製弁当箱の生産で、国内のシェアナンバーワンを占めていたが、プラスチック製品や海外製品の増加、コンビニ弁当の利用により現在は生産中止。代わって近年は金属製野球バットをはじめ、自動車部品、空調用のファンなどを製造している。



各種の金属バットを生産

● ひとくちメモ

- 環境問題が叫ばれる中、地球温暖化の抑制にもつながる自動車の軽量化に対し、アルミニウムの活用が高まっている。そうしたニーズに応えるため、(株)住軽テクノ恵那では、近年は自動車部品の加工が多くなるウェイトを占めるようになってきている。
-
-
-
-
-

関連項目

53

人と地域を結ぶ

あけちてつどう
明知鉄道

1985（昭和60）年に、旧国鉄明知線を引き継いで開業した第3セクター鉄道。経営は恵那市をはじめ、県や中津川市、地元企業などが出資する明知鉄道㈱が行う。恵那駅を起点、明智駅を終点とする25.1キロメートルを結び、恵那市内9、中津川市内2の11駅がある。急勾配と急曲線の連続する路線であり、1991（平成3）年に開業した飯沼駅の駅構内の勾配は33パーミル（1,000メートル当たり33メートル上がる計算）。日本で第1位の急勾配駅（ケーブルカーを除く）として知られる。ちなみに、野志駅が第2位。現在は急勾配の所には、駅の開業許可が下りなくなったため、飯沼駅がある限りこの日本一は破られない。生活や観光の足として重要な路線だが、利用者の減少が続き経営状況は厳しい。このため、寒天列車、きのこ列車などのイベント列車を企画・運行し、2008（平成20）年12月には11番目の駅「極楽駅」を開業するなどして、経営努力を続けている。



岩村駅で乗客を乗せる明知鉄道

ひとくちメモ

- 2010（平成22）年3月にDMV（デュアル・モード・ビークル）の実証実験を行った。DMVとはJR北海道が開発する、鉄道と道路の両方を走行可能な車両。この実験は、国土交通省の新たな技術・地域公共交通システムの普及促進調査の一環として、恵那市が実施した。

関連項目

- 岩村電気軌道（P9）
- 細寒天（P39）
- 花白温泉（P46）

54

国内栽培発祥の地

えな
恵那シクラメン

大正時代に故伊藤孝重（恵那市東野）が日本で初めてシクラメン栽培を開始。この地域で栽培されたシクラメンを「恵那シクラメン」という。しなやかに伸びた花茎、チョウが舞い降りたような花は、花びらが上に反り返ることから和名「カガリビバナ（篝火花）」とも呼ばれる。伊藤孝重は、1896（明治29）年、東野の養蚕農家に生まれ、上田蚕糸専門学校（現信州大学繊維学部）の修学旅行中に会ったシクラメンに魅せられ、当時大井ダムの建設に携わるアメリカ人技師の奥さん（ドイツ人）の勧めで栽培の道に。日本での栽培は大変珍しかった時代に独学で取り組み、昭和初期には成功。その後、自ら販路を拡大し、恵那を全国に誇るシクラメン産地に育てた。



恵那シクラメン

ひとくちメモ

- 恵那・中津川地域は、種苗の全国シェア8割以上を占めるほどの一大産地として成長し、現在、岐阜県はシクラメン種苗生産量日本一。

関連項目

- 福沢桃介（P14）
- 大井ダム（P42）

55

恵那名物栗菓子の原料

えなぐり 恵那栗

東美濃地域で栽培され、和菓子店で栗きんとんなどの原料として使われている。現在、主に10品種が市内のクリ農家で栽培されており、多くのクリ農家は早生、中生、晩生までいくつかの品種を混合栽培して、安定した収穫量を確保している。恵那市の年間収穫量は147ト（平成19年 農林水産省データによる）と、県下では多い地域。クリ農家や研究者らの努力によって、秋一番に収穫でき、栗きんとんにぴったりの品種「**胞衣**」や、虫害に強く収穫も安定して栽培しやすい「**金華**」などが開発されている。恵那栗は年々認知され地域経済の活性化、恵那ブランドなどの代表となっている。



恵那栗

- **ひとくちメモ**
- クリと言えば東美濃と言われ、栗きんとんは今では
- 全国に聞こえる銘菓となっている。地元ではそれら
- 栗菓子の需要に応じてクリ栽培も盛んになり、超低
- 樹高栽培という全国に誇れる革新的な剪定方法も
- 開発されている。

関連
項目

- 「えな」という名 (P4)
- 栗きんとん (P38)

56

木目が美しく丈夫な高級木材

とうのう 東濃ヒノキ

東濃地域で生産される良質のヒノキ材。この地方は海拔500～1,000mでヒノキの生育地のほぼ北限に位置し、やせ地で年間降水量が少なく、気温の寒暖差が激しいなど、ヒノキの成長に理想的な気候条件。東濃ヒノキの特徴は、通直、正円。成長には歳月がかかるが、年輪幅が細く均整で、木目が薄いピンク色で美しく、強度・耐久性が高いことにある。戦後、作れば何でも売れた時代に、あくまで買い手の立場を尊重し、正しい寸法・乾燥により高品質の製品を市場へ安定供給した。その結果、昭和30～40年代の極めて短い期間に、ブランド化達成を実現した。



東濃ヒノキ

- **ひとくちメモ**
- 古くは江戸時代、尾張藩が御用林として管理し、
- 名古屋城や本丸御殿の建築にも使用された歴史を
- 持つ。また、さらにさかのぼり室町時代には、足利
- 義政が造営した東山殿（現銀閣寺）や、南禅寺
- の用材としても利用された歴史を持つ。

関連
項目

57

日本一大きい窯

おくやはぎ すみや がま
奥矢作レクリエーションセンター炭焼き窯

この窯は、縦10^{メートル}、幅3^{メートル}、深さ2^{メートル}、容量60立方^{メートル}（大型ダンプ11杯分）で、炭焼き窯としては日本一。岐阜県、長野県境から愛知県を流れる一級河川矢作川上流の矢作ダムには、毎年約600立方^{メートル}もの大量の流木が流れ込む。中には切り捨て間伐材も含まれる。ことに、2000（平成12）年の恵南豪雨（東海豪雨）災害では、流木が湖面を埋め尽くし、対岸まで歩いて渡れるほどであった。流れ着く全ての流木を炭にすることを目的に、奥矢作レクリエーションセンター下の湖畔に炭焼き窯を造成し、2007（平成19）年から稼動。運営はNPO法人奥^{おくやはぎ}矢作森林塾が行っている。



炭焼き窯の入口

● **ひとくちメモ**

- NPO法人奥矢作森林塾は、恵南豪雨災害をきっかけに、荒廃した山林の再生とともに、地域の暮らしを見直すため設立された。空家を再生し活用する「リフォーム塾」の開催や、田舎暮らしを体験できる宿泊施設「結の炭家」の運営など、都市と農村の交流を深める活動をしている。

関連
項目

・矢作ダム（P43）

58

室町時代から採掘

とう ど
陶土

山岡町原地区から産出される陶磁器などの製造に使われる良質な粘土。1429～1441年（永享年間）に武蔵の国の陶工が現在の瑞浪市陶町大川地内に窯を築き、原地区の蛙^{がいろめ}目粘土を使ったのが発祥の起源。江戸時代後期、1854～60年（安政年間）に入るといっそう脚光を浴びるようになった。また、明治・大正時代には美濃焼の窯元たちに「原の陶土がなければ茶碗は焼けない」とまで言わせたほど。石英^{せきえい}の粒や雲母^{うんも}の砂が大量に含まれており、石英の粒が蛙^{かえる}（方言でガイロ）の目のように見えることから、蛙目粘土と名づけられた。有機物が少なく、耐火度が高い。



陶土の乾燥風景

● **ひとくちメモ**

- 山岡町では川の高低差を利用した陶土づくりも行われていた。川から水を引き込んで水車を回しドラムを回転させて、長石や珪石^{けいせき}を砕いて製造。水車は木で作られたとても大きなもので、昭和30年代まで小里川^{せりがわ}周辺に散在していたといわれている。

関連
項目

・おばあちゃん市・山岡（P25）